

縦

意義につ
いての問

級の讀みを伸展させることはどれほどか知れぬ。因にいふ、縦は一尺二寸が手ごろだ。縦の先が竹の節になつてゐて、黒板をうつと、さえた音が強くも出るのがよい。藤の縦や、先のさけてゐる縦は、殆ど縦の要をなさない。低中學年の教室で、縦の備へてない教室は、平素の弛んだ教授が思はれる。或人はいく、「縦は何年位したら振れますか」と。私はこれに答へて、「私は四年間一年生を擔任したたものです」といつた。縦のたしかに振れる教師は、まさに一人前だ、子供の讀聲のあとから、文字を指すやうなへまな縦はよしたがい。縦は讀聲の一步先を指していくものだ。それが中々に修行を要する事だ。

讀みが終つたら、次のやうな問にうつるがよい。

- この中で――板書をさして――皆さんの一番好きだと思ふのはどれ？（この間で兒童の讀取つてゐるものがわかる。答については、どれがよいこれがいと、にはかにきめてはならぬ）
- うれしうな所は何處？（さけびの「サイタサイタ」に來るか。「サクラガサイタ」の事象にこもる喜に來るか。どちらに來てもよいが、それは形象を讀む端緒だ）
- さいたといふが、さかない前にはどんなに待つてゐた事だらう。（こゝに時が目覺める。何時咲くか。待つ心。花を見つけた喜。さいた／＼は満開の満花）
- さくららの花ばかりを見てゐる様だ。（他の花は目につかぬらしい。その心が「ガ」のてにはに見える）
- 言ひよいね。（サササとサが上に四つ。タタラタと響の似たのが下に四つ。サイタサイタが三つも繰返されてゐるのだもの）

何だかだと出たら目の鑑賞話よりも、かうした問――發見さすもの、誘導するものによつて、形象を讀む眼は開ける。ことばの奥にこゝろを讀む目が開けたら、文字による國語教育はひとりでに伸展する。

挿繪につ
いての問

因に挿繪を見させる際の重要な問――誘導的――を三記してみよう。

- 水色の遠い山は？（霞んでゐるの）
- 近い山に生えてゐる木は？（松か杉か樺か樫か――兒童の知つてゐる常緑樹をいはせる）
- 山の麓の横はうつくしいね／＼（うす紅い雪のやうだ。うす紅い雪のやうだ）
- 花の林の下には誰があるだらう？（花見の人々。お辨當さけて）
- 二本の櫻の木の下には？（サイタサイタと喜んでゐる人――作者など小さきことをいはせてはならぬ）

○ この花の二三日前は？（ちらほらさいてゐたらう）

○ この花の二三日後は？（ちら／＼ちるだらう。風が吹いたら花吹雪）

○ 散つた花びらは何になる？（こみになる。水に流れて川へ行く。緑にはして首かざりにする）

方挿繪と縦

挿繪は本文以外のことを多く載してゐる。文字の自由がきゝ出したら、それを繰らせるのが、やがて本文を確實に習得させることになる。綴方で進めて行く假名教授とは、これをいふのだ。

師に笑はれるかも知れぬが、「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」を叙述・表現・象徴の三機構でながめてみよう。變だつたら同志諸兄姉も教へて下さい。師もまた教へて下さい。印刷面即ち文字語句をたどつて、櫻花満開の挿繪のやうな姿を思ひ浮べさせるのが、叙述的であらう。どのことば

二時間目

やまと民
族と櫻一世一代
の願

に婚しさがこもつてゐるか、その喜の如何ばかりであるか想像させるのが、表現的機構であらう。「タ」とあるに、待ちに待った人人の心、「ガ」とあるに、櫻の花ばかりが目についてゐること、かく櫻を賞観することが大和民族の心の姿であることに言及して、はじめて象徴的機構とはいはれるのではあるまいか。

二時間目に、讀みや書寫の復習を終つたら

○ 日本人の一番好きな花は？（さくら）

○ なぜ好きなのだらう。（さつと咲いて、さつと散る。色の淡いのもその一つ）

この問を忘れてはならぬ。この間で國心は培養されるのだ。日本人は櫻と離れては到底快き生活をすることは出来ない。新領土のどこにいつてみても、櫻の移植に腐心してゐる。現に朝鮮の咸鏡北道清津の公園では、内地から手頃な櫻樹を移し植ゑてゐるが、それが梢からかれて灌木のやうになると、三四年毎に植ゑかへてゐる。大和民族の櫻に對する執着の程が察せられる。宜なり、これを國花と呼ぶこと。年々の國花によつて、國心の清めらるゝこと、それ幾何ぞや。

同志青山廣志君を煩はして、「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」の、私の精一ぱいの取扱を筆録してもらひたいと思ふが、これは私が入學當初から、一年生に接して、擔任先生とかはらぬ親しさを兒童からうけなければならぬ。今年は到底不可能だが、在京同志の誰かが專一の擔任にまはつたら、我も一世一代、一年生最初の國語教育を筆録してもらつて、之を永久に傳へたいと思ふ。

シロ

シロ（二時間）

大は兒童にとつて最も親しみの深い動物である。それが讀本の一の巻の第二座を勝ち得た所以。「サクラ」にくらべると、簡單だ。蓋し「サクラ」は複雑でも、國花なるが故に、巻頭を飾つたものと思ふ。

これは編者の心づかひのあるところだ。

教材 「コイ コイ」は呼ぶ聲だ。軽い。遠くに愛犬「シロ」を見つけての聲である。「シロ」とその名を呼んだところに、親愛の情があふれてゐる。最後の「コイ」は命令と見るがよい。この文は呼ばれた「シロ」からも考へさす要がある。「コイ コイ」と呼ぶ聲をきいて、「シロ」は一散にかけつけて來たのだ。途中「シロ」と我が名を呼ばれ、「コイ」と力のこもつた聲で命令されて、いそいでやつとこゝに來たのだ。小主人の親愛、「シロ」の従順、我あるがために彼あり、彼あるがために我ありといふ姿だ。聲調のととのつてゐるのはサクラと同じ。

教壇 まづ挿繪の觀察からはひる。地色の黄はいとお氣をあらはすもの、小主人親愛の情は、その顔に、左右の手に、否からだ全體に溢れてゐる。「シロ」の小主人をなつかしむ心は、その姿勢全體に散むことは出来るが、耳と鼻の先に、第二の命令をまつ緊張振が見える。もし許さるれば、飛びかゝつて、小主人の顔を一なめなめたいといふ希望が、前の右足にかすかに見えてゐる。次に教師が